慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ルードルフ・フォン・エムス『善人ゲールハルト』をめぐって : 革新と伝統
Sub Title	Neues im Alten, Altes im Neuen : Über den ,,Guoten Gêrhart" des Rudolf von Ems
Author	平尾, 浩三(Hirao, Kozo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1999
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.76, (1999. 10) ,p.346(27)- 363(10)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	黒岩純一, 平尾浩三両教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00760001-0363

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ルードルフ・フォン・エムス『善人ゲールハルト』をめぐって
— 革新と伝統 —

平尾　浩三

以下は1993年10月5日，日本独文学会秋季研究発表会（於 富山大学）で平尾の行なった口頭研究発表の原稿である。その後，諸務に追われて活字化する機会なく，いささか時を経たが，定年目前の今この場を借りて，そのままの形で，記録に留めることとした。

Rudolf von Ems による，今日に知られるかぎりにおいては処女作とされる韻文物語 “Der guote Gêrhart” （『善人ゲールハルト』）は，わが国では未だポピュラーと呼べない作品ですので，はじめにそのあらすじを辿っておきます —

皇帝 Otto は自らの寄進によって Magdeburg 大司教座を設け，世の称賛を浴びているが（77−252），自分は善行をもって神に奉仕したゆえに天国において必ずや良き報いを得るであろうと考え，そのことについて神の御心を問い質そうとする（253−509）。ところが天使の御声の告げるには：「そちの善行を神は嘉(よみ)しておられた。しかしそちは傲慢にも，神に向かって善行を誇ったので，天上での報いをもはや得られぬ。そもそもそちの善行など，Köln の商人 Gêrhart の為(な)した善き行為に比べれば，何ほどのものでもない」（510−626）。驚いた皇帝は Köln へ旅し，der guote Gêrhart と呼ばれる商人を探し出す。Gêrhart は富裕な商人で，世の信望を集めている様子。皇帝は彼を傍に呼んで，事の次第を尋ねる。しかし驕ることを知らぬ Gêrhart は，罪深き私めの僅かばかりの善行など，語るに値しませぬと言って話そうとしない

(877－1118)。長く拒んだ末に，皇帝の懇望に屈しておずおずと語り始めたのは，次のような体験談であった（1129)。

私は交易のために船旅をして異国を訪れ，見事な品物をたくさん買い入れたのち，いよいよ故郷Kölnを目指しました。これらをもち還ったなら，莫大な富が得られる筈です。ところが嵐に巻き込まれ（1219－30），ようやく辿り着いたのが異教徒の地 Marroch（= Marokko）（1413）。どうなることかと思われましたが，その地の伯 Stranmûr にめぐり会い（1333），伯は私を保護してくださいました（1343）。そして伯は，当地に捕らえられているキリスト教徒たちと，私が船に積んでいる商品全部を，交換しようと提案なさいます（1493）。囚われ人というのは，美しきノルウェー王女とその侍女たち，またイングランドの騎士たちです。すなわちイングランド王 Willehalm 様はノルウェー王女 Êrêne 様への求婚のためにはるばるとノルウェーを訪れられ，婚約成って姫を伴い，イングランドへ帰国しようとなさったのですが，一行は嵐のために散り散りになられて，姫はイングランドの騎士たちやご自分の侍女等と共に，Marokko に辿り着かれて惨めな虜囚の日々を送っておられるのでした。別の船に乗っておられたイングランド王については，生死さえ不明とのこと。

高貴な方がたを捕虜として連れ帰れば，多額の身代金が見込まれる，とは申せ，貴重な商品をすべて手放す危険を思うと，商人たる私め，容易に決断できません。しかし，迷う私の夢に天使が現れられ（1831），利得を思うて逡巡している私を，お責めになったのです。かくて私は商品をことごとく手放して，捕虜たちを引き取りました（2372）。この方がたは異教徒のもとでの長い虜囚の暮らしから解放されて喜び溢れ，私に深く感謝なさいます。私はイングランドの騎士がたには故国へお還りいただき(2647)，王女様は私がKölnへ伴って，丁重に養育申し上げます。かくして一年以上が流れましたが，イングランドからもノルウェーからも音沙汰はありませぬ。花婿となられる筈のイングランド王は亡くなられたとしか，もはや考えられませぬ。かくて私は王女様に，私の伜の妻となられることをお勧めしました（3137）。王女様の求められたさらに一年の猶予期間も虚しく過

ぎて，王女様はついに，伜との結婚に同意なさいます（3229）。いよいよ婚礼の祝宴。ところがそこへ，みすぼらしき巡礼が一人辿り着き（3710），花嫁の美しき姿を涙に昏れて見つめています。

これこそイングランド王 Willehalm 様でありました。それを知った私は，Willehalm 様を王者に相応しき姿に飾り（4147），嘆く伜を説得して Êrêne 様との結婚を即刻中止させ（4460），Willehalm 様と Êrêne 様との婚礼を実現させたのであります（4703）。かくて結ばれた若き王夫妻は，Köln の地で私の庇護のもとに，幸せに暮らしておられました（5099）。

他方イングランドでは，王様はすでに亡き者と見做され，豪族の一部が叛乱を起こして，王座を奪おうとしているとの噂（5138）。それを伝え聞いて心痛なさる王様のために，私は船を整え，共にイングランドへ渡ります（5223）。まずは私が一人で London 都城に入りましたが，今やそこの宮廷は王位継承問題で紛糾のただ中。ところが，高貴な人たちの中には，かつて私が解放してあげた方がたも揃っておられます。私の姿を認めた方がたは，恩人との再会を喜ばれ，無理矢理に私をイングランド王位にお就けになりました（5530）。しかし私は，待機しておられる Willehalm 様を都城にお迎えし，この方に王冠をお返ししたのです（5718）。今や国の秩序は回復されました。さらに私の願いによって叛徒らの罪も許され（6240），イングランドは喜びに包まれたのであります。私は熱烈な感謝を浴び，公や伯の地位を提供されましたが，妻への小さな土産以外にはいかなる報酬もご辞退申し，王様や高貴な方がたのお引き留めも固辞して，Köln へ還って参りました。そして恵まれた日々を送っておるのでございます。私の為した善行とは僅かこれだけのこと（6630）。

これが Gêrhart の告白であった。皇帝はそれを聞き，謙虚さと愛に満ちた Gêrhart の心に感じ入り，それにひきかえ，善行を神に誇った驕慢なる己の罪を思い知る。皇帝は Magdeburg へ還り，敬虔な心で贖罪の生活を送ったのである（6920）。

韻文物語“Der guote Gêrhart”のあらすじは，かようなものでありま

す。作者は騎士詩人 Rudolf von Ems，彼は Montfort 家の Ministeriale（家人）で，オーストリア西端 Vorarlberg，Hohenemsの ― 後に“Das Nibelungenlied”写本の発見で有名となる Hohenems の ― （今では廃墟の姿を曝して Altems 城と呼ばれている）堂々たる山城に，住まい致しておりましたが，彼が13世紀初期（1220年頃?）に，今日不詳のラテン語原典を踏まえ，ドイツ語（Mhd.）7000行（各行四揚音，対脚韻）近くを費やして著したのが，この作品であります。制作は，Rudolf von Steinach という人物の依頼を受けて行なわれたのですが，この Rudolf は，作者の居城から遠からぬ Konstanz を支配する司教に仕える，同じくMinisteriale 身分に属する者でありました。

中世文芸の専攻者にはよく知られた物語とはいえ，この作品の位置づけ等をめぐっては，研究者の間に少なからぬ戸惑いが見られます。

Rudolf von Ems は，彼に先立つ Hartmann von Aue，Wolfram von Eschenbach，Gottfried von Straßburg 等の陰に置かれて，従来 Epigone として扱われてきた作家ですが，他方，この物語には，それ以前の，ないし同時代のドイツ文芸には認められない新しさの存することもまた，指摘されるのです。

その新しさはどこにあるのか ―

言語から言っても詩形から言っても，いわゆる中世ドイツ古典作家におけるのとさして変わらぬ形態を保つにもかかわらず，この作品に，Hartmann 等の物語とは違った肌触りの存することは，一読して感じられるところでしょう。その差を一言で表そうとすると，entzaubert（呪縛から解き放たれた）という形容が思い浮かびます。物語の場や登場者を比較しただけでも，Heldenepik（英雄叙事詩）や Artusroman（アーサー王物語）が深き森の奥に，また霧に包まれた孤城に，超人的な騎士や妖しき美女を，不可思議なる巨人や小人を，そして魔物，妖精，龍，野獣等を出没させて奇想天外な展開を見せるのに対し，まずこの物語の舞台はと見ると，それは大司教座の置かれた Magdeburg，ドイツ語圏第一の大都市 Köln，商業の繁栄する Marokko，華麗なる北都 London 等，場所のアイデンテ

ィファイにわれわれの苦しむ必要さえまったくない，ヨーロッパとその周辺のリアルな大地，文明世界であります。そして，例えば Köln から London に到る旅路は，次のように描かれます —

> … かくてわれらは，見送りの者らと別れ，ラインを下り，海を渡って，イングランドに着きました。そしてたちまちわれらが船は，とある河口へ送られましたが，それは滔々たる水の流れ。その川は今も当時と変わることなく，国原を貫いて，ロンドン城外を流れており，ロンドン川と呼ばれています。潮の波に運ばれて，船は川路にはいりましたが，船の航行に相応しく，深い底も，流れも岸も，まことに宜しき川であります。船は流れを逆上り，風に奥地へ送られまして，とある入江に着きました …（5255－5267）

道筋のこのクールな説明を，Artusroman に属する諸作品の，えてして荒唐無稽な地理感覚と比べるならば，差は歴然としていましょう。そしてそこに登場する君主はもはや Artus 王でもなければ Marke 王でもありません。皇帝 Otto が，Sachsen 朝 Otto 一世（ドイツ王在位 936－973年，ローマ皇帝即位 962年）を指すことは申すまでもなく，彼は現実に Magdeburg に大司教座を寄進した人物であります。しかも同時にこの Ottoという名に，作者は自分と同時代人であるWelfen 家 Otto 四世への批判 — ドイツ王位をめぐる抗争において Rudolf はもっぱらStaufen 家の側にありました — を暗に込めた形跡もあり，ここに登場する Otto はメールヘン的な君主とはおよそ程遠い存在です。そして皇帝に向かって語る Gêrhart の長い話から枠内の物語は成り立っていますが， Köln の商人 Gêrhart さえ，その実在のモデルが近年大いに論じられている人物なのであります。いわゆる中世古典文芸に親しんだあとで，魑魅魍魎の影もない “Der guote Gêrhart” に出会うとき，新しくリアルな，いわば生身の人間の世界が突如眼前に開けたがごとき気分を — まさにentzaubert という感触を — 私たちは味わうのであります。

作品中の超自然的な現象としては，天使の出現がありますが，これとて，天使の声の直接に響くのは，実は物語の外枠の Otto に対してのみであって，Gêrhart に対する天使の登場は夢の中の出来事です。しかも，これが

夢であって，現実ではなかったことを，作者がことさらに強調しようとしているとしか思えないのであります —

… 苦しく思い患いながら，甘き眠りの揺籠に，わが身を委ねておりますと，ひとりの天使が現れられて — そう思われたのでありますが — わたしは眠りを覚まされました。わたしははっと目覚めます。天使を拝したのが，わたくしの，眼であるとは，わたくしめ，つゆ申したくございませぬ。眠りの中のわたしの心が，天使の尊き御姿を，拝したとわたしは申します。夢路遙けく辿りつつ，ふとわたくしは思ったのです — 天使の御声が，わたくしを，お呼びになったのではあるまいか。わたくしの名を二度繰り返し，お呼びになったのではあるまいか …（1821－1830）

天使の出現という神秘の場面に臨みながら，それが夢であったと強調することによって，作者は自らの醒めた態度を示していると申せましょう。

しかしなんと言ってもこの作品の斬新な性格は，登場人物を階級的角度から考察するときに浮かび上がります。心の欠陥を神から指摘されるのが皇帝であり，皇帝が教えを受ける人物，神の御心に最も適った人物は，一介の商人に過ぎません。商人が — 「僧・騎士・農民」という中世における身分観念の埒外の，文芸では wuocheraere（利益を貪る者）として軽蔑的な扱いを受けるのが一般的であった商人身分の男が — 物語の主人公を演ずるという設定そのものが，ドイツ文芸に先例をもたず，しかもその商人が，神の御目には皇帝より上に位置するのですから，この物語が時に der erste Kaufmannsroman in deutscher Sprache（ドイツ語で書かれた最初の商人小説）と呼ばれたことも頷けるのであります。

主人公 Gêrhart は Köln に居を構えて交易を営みます。利潤追求を旨とする，抜け目なき才覚を具えた商人であって，商人による利潤追求活動が物語の展開に大きな役割を果たすのは，ドイツ文芸においてこの作品が最初であります。遠隔地交易を営む Gêrhart の具えた知恵が特に明瞭に現れるのは，Marokko に辿り着いた時の彼の行動です。漂流して来た者は身柄も財も，すべてその地の伯の支配下に収められる掟であるにもかかわらず（1408－1410，1756－1758），Gêrhart はその運命を免れ，手厚い保護を受けさえするのです。どうして彼のみが優遇されるのか？ それは彼

が巧みに偽って，心ならずも漂流して来たことを当地の伯に悟らせず，あたかも始めからこの地との交易を意図して来訪したかのように語ったからに他なりません（1369-1376）。遠隔地商人としての Gêrhart のしたたかさは，そんなところに躍如たるものがあります。

交易の旅にある Gêrhart の思考はまさに商人のそれであります。彼は捕虜を買い取りますが，その時の彼の心はたしかに憐愍の情と無縁でないとはいえ，単純にそれのみによって動かされたのでもなく，被害を蒙らぬこと，身代金による利益を獲得することから，その思いは離れません。Gêrhart は囚われの騎士たちに向かって言います —

> … 仮にわたしが，かかる虜囚の縛めから，解放致してさし上げて，絶望の淵からお救いしても，その時になって，あなた様がたが，わたしの善意を踏みにじられ，憎しみをもってお報いになり，「自由を束縛致すなら，危ない目にも会わせるぞ」と，わたしを脅迫なさるのなら，いっそわたしは始めから，出過ぎたことは致さずに，運んで参った商品を，わが物として守りたく，あなた様がたの敵意を浴びて，被害を蒙ることなどは，真平御免でございます。しかし，お気持ち次第では，当地にわたしの運んで参った，商品すべてをことごとく，得をしようが損をしようが，あなた様がたの御為に，投げ出すことと致しましょうが。ただし，あくまで条件は，あなた様がたが後の日に，わたしに対して償われ，出費を埋めてくださることです。わたしの求めることに対して，あなた様がたがわたくしの意に，お背きにならぬということを，約束なさってくださるならば，わたしはひとえに喜んで，かかる虜囚の縛めから，あなた様がたを解き放ち，苦しみを終わらせてさし上げましょう（2057－2078）。（関連箇所：2737－2740）

また Êrêne 姫に向かっても —

> … わたくしと共に，姫君が，家路につかれるということが，姫のご意思であるならば，してそれが，姫のご意思，姫のお気持ちであることを，誠実をもって誓われるなら，してまた，わたしがこの地にて，手放す財を後の日に，姫の御力の及ぶかぎりは，して，わたくしの望むがままに，お償いくださるのであるならば，わたくしめ，有しております商品を，あなた様がたの御為に，すべてさし出す覚悟のほどは，致して参ったのでございます（2132－2140）。（関連箇所：2198－2203，2366－2370）

執拗に彼が求めるのは損失の回避，さらには身代金の獲得であり，同じ

囚われ人の解放といっても，彼にあっては，Êrec や Îwein の行なうそれとは意味が異なります。かような商人が主人公として活躍する文芸作品は，ドイツ語圏にはこの時まで，たしかに存在しなかったのであります。

Köln において Êrêne 姫を大切に庇護する Gêrhart は，ついに商人である自分の伜と王女との結婚を考えます。大司教も喜ばれ，自らの手で Gêrhart の伜に刀礼を授け，騎士身分となさいます。さらに物語の終末近くでは商人 Gêrhart は，一時的にせよイングランドの王冠を戴きますが，ドイツ文芸においてそれ以前には描かれることのなかった，かように極端な形での階級間流動は，単純に申せば，歴史の大幅な先取りであります。

また，Gêrhart の語る weltlich（世俗的）な物語が，天上位階をめぐる geistlich（宗教的）な問題提起の中に見事に嵌め込まれており，全体が Rahmenerzählung（枠物語）を成すこと自体この物語の構成の斬新性であり，そして Gêrhart による長い体験談は，ドイツ文芸における最初の Ich-Erzählung（一人称小説）でもあります。

急ぎ足で指摘して参りましたが，これらをざっと見渡しただけでも，1220年頃，すなわち“Das Nibelungenlied”がわれわれの知る形で完成し“Parzivâl”が著されてからまだ20年も経たない頃に，本作品の成立を見たのは，ドイツ文芸史上驚くべき事件であり，この作者を Epigone として扱うことの妥当性は，大いに疑わしく思えます。

しかし，革新性，近代性のみの強調が，この作品全体の正しい理解につながるか否かは，慎重に検討されるべきことなのであります。

その問題を象徴的に示す表現として指摘致しますが，はるばると訪ねて来た皇帝に対して Köln 大司教は，Gêrhart を評して何と言うでしょうか？“ein tugentrîcher wîgant”（器量豊けき強者（つわもの））（814）と申すのであります。wîgant，本来「戦う」を意味する古い動詞 wîgen の現在分詞に由来する，当時としても古風な名詞，「戦士，勇士」といった意味で使われたこの語が，商人 Gêrhart に関して用いられているという事実は，私たちの興味を誘います。

そう思って観察すると，異郷では生粋の商人としての振る舞いをしたGêrhart とはいえ，Köln におけるその行動には特に市民的と呼ばれるべき特徴がなく，丹念に描かれるのは刀礼と婚礼の祝宴であり，繰り広げられるのは騎士たちの騎馬試合であります —

> 近づく宴を前にして，大きな桟敷を作らせまして，中庭には杭をしっかり打たせ，騎馬試合の場を広びろと設けさせたのでありました。騎士らが勇んで試合を挑み，互いに馬を駆るときに，力のかぎり馬たちが，走り，ぶつかり合えるよう，万端の準備を致します。また，わたくしと伜めが，して伜めと行動を共にしようとしておられる，若者がたのどなたもが，馬と豪華な装束に，事欠いたりは致さぬように，気を配ったのでありました。またお客様がたの饗応に，必要なものは何であれ，叶うかぎりに整えさせます。わたくしめ，心が弃り，聖なる夜の訪れが，待てないほどでありまして，朝日の昇ってきたときは，もう嬉しくてたまりませぬ。そして願いにお応えくださり，殿様がたがご領地から，騎士を大勢連れられて，おいでになったのでございます。伜めはいとも堂々と，装いよろしく，騎士然として，都城の門前に馬を進めて，殿様がたをお迎えしますが，伜の頼みに従って，若者がたも門前にて，揃ってお迎えするのです。してまた市民の方がたも，前夜の宴に列せんものと，装い見事に凝らされたる，誇りぞ高きご婦人がたを，いとも大勢伴われ，弦楽の音も賑わしく，あまた集うて来られます。わが大司教様も威風堂々，わたしと共に馬を進めて，拙邸にお入りくださって，音楽の鳴り響くなか，席にお就きになりました。皆様がたも坐られます。かくて食事が始まります。（3435－3472）

ここに描かれるのはまさに伝統的な騎士の世界であって，Kollektiv としての市民は登場しても，彼らの振る舞いは宮廷人のそれと変わるところがありません。Gêrhart は祝宴や騎馬試合を優雅に催し，高貴な客人がたの間を縫って悠々と馬を操ります。そして商人 Gêrhart の催す祝宴を truhsaeze(内膳頭)や schenke(献酌侍従)が取りしきっていますが(3687)，宮廷の重職である筈のこの者たち，いったいどこから現れたのでしょうか？ 商人 Gêrhart の館にも truhsaeze や schenke が置かれているのか，大司教に伴われてここにいるのか，はなはだ珍妙であります。他方，市民の日常の生業などは，まったく描かれません。市民を描く彩りの淡さは，女性の扱いに端的に現れています。およそ市民女性は作品全体を通じ

てなんの役割も果たしません。Gêrhart の妻は，登場はするが活躍はせず，名前さえ与えられていないのに対し，王女 Êrêne 姫の美しさ，聡明さは言を尽くして述べられるのです。まさに伝統的な宮廷騎士文芸におけるのと変わらないのであります。

そして Gêrhart をめぐるこのような世界が，詩人の奇妙なファンタジーの産物に過ぎなかったと，断ずることはできないのです。これは当時の一つの実在であったと言うべきではないでしょうか。Köln をはじめとして，隆盛の兆しを示しつつあった都市において，まさに Gêrhart のような富裕市民は騎士文化の伝統に憧れて宮廷騎士の流儀を生活に採り入れつつ，政治にもしだいに深く介入し，時に騎士たちを凌駕して有力者となる兆候を見せていたのであります。上の引用箇所にある，一見奇異な Gêrhart の世界も，このような新しい風潮を踏まえるものとして理解されるべきでありましょう。つまり，これは Patrizier の世界であり，そこにおいては上層市民とMinisteriale（家人）は互いに接近しつつ，複雑な絡み合いを示しているのです。祝宴の場における Gêrhart のような豪商の行動は，自ら槍を揮わない点を除けば，上層騎士のそれとさしてえらぶところがないのでしょう。そして後に述べますように，このような新しい社会動向に対する，騎士詩人 Rudolf から発せられた警告としての性格を考えないでは，この作品の正しい位置づけはあり得ないのではないか，と思われるのです。

上記のように描かれている Gêrhart の暮らしや行動を，作者 Rudolf はいかなる角度から見ているのでしょうか —

ここでしばらくドイツ宮廷騎士文芸の主流とも呼ぶべき Artusroman との遠近関係において，“Der guote Gêrhart” を検討したいと考えます。“Der guote Gêrhart” に先立って登場し，ドイツ宮廷騎士文芸を代表する地位を占めていた作品と言えば，フランスの Chréstien de Troyes による作品を原典として Hartmann von Aue の著した，円卓騎士 Êrec を主人公とする作品を，また Îwein を主人公とする作品等を思い浮かべるべきで

しょうが，“Der guote Gêrhart”は，外面的には Artus 王とも円卓騎士とも無縁とはいえ，これら Artusroman の伝統によって密に縛られていると，考えられます。

Artusroman とこの作品との親近性を象徴的に語るものとして，まずその具体的な描写の類似を示しましょう。 Willehalm 王の宮廷における祝宴を描く，次のような記述をご覧ください —

> 走る方あり，跳ぶ方あり，物語る方，また歌う方，こちらでは騎馬，あちらで踊り，今こそ騎士の祝宴は，その愉しみの極みです。（6395－6398）

これはまさに Artusroman に頻出する祝宴描写の典型です。これとの類似表現を，Artusroman から任意に一例挙げるとすれば —

> ある者たちは婦人と語らい，ある者たちは逍遙し，踊る者あり，歌う者あり，走る者あり，跳ぶ者あり，弦楽に聴きほれる者，的に槍をば投げる者，ある者は恋の苦悩を語り，ある者は優れた武勇を語る。（“Îwein” 65－72）

また Willehalm 王と Êrêne 姫が初夜の契りを待ち詫びる，官能的な描写 —

> … 果てしも知れぬ宴楽を，「長すぎる，まだ終わらぬか」と思うた勇子（おのこ）が，もしもその場にいたとするなら，それはミンネに圧倒された，一人の勇子（おのこ）。ミンネに心を苛まれ，ある婦人の心を慕う者。婦人の心もひたすらに，心底からの愛をもて，勇子（おのこ）の心を抱きしめます。して「ミンネ夫人」がわたくしに，語ったことでありますが，夜の訪れを心中ひそかに，苦しみ焦がれて待っていたこと，婦人も実は同じにて，ただ，そのように夜を待つなど，ご婦人らしき嗜みとは，いささか申せぬことでした。婦人の身にてありながら，何故（なぜ）に夜を焦がれたか，「ミンネ夫人」がわたくしに，賢き婦人のお知恵をもって，ひそかに教えてくれました — 愛の力，ミンネの呪縛が，生来（せいらい）淑やかな婦人の心を，すっかり征服してしまい，彼女は愛撫をひたすら求めて，焦がれるようになったのでした。恋慕の悩みに久しき間，浸りきたった夫君の思いが，婦人の心にひたと迫って，夫君の焦がれは婦人の心を，征服致してしまったので，婦人も夜の訪れを，恋慕に燃える熱情をもて，恋い慕うたのでありました。（4987－5008）

この場面に触れて，初夜を待つ Êrec と Ênîte の思いを連想することは，決して見当外れではありますまい —

彼はあまりの待ち遠しさに，翌日の夜までよりも，もっと長くは，彼女の愛を待ち兼ねる思いである。彼女もまた，面にこそは現さね，同じ心を抱いていて，だれも見つめていないなら，いとも優しい戯れが，きっと生まれたことであろう。しかと申し上げたいが，ここは「ミンネ夫人」の大勝利。「ミンネ夫人」が二人を支配し，二人に激しい痛みを与えた。互いに眸を交わすとき，二人の味わう苦しみは，ひもじい思いでいるときに，たまたま餌を眼前に，持って来られた大鷹の味わう気分にほかならぬ。ひとたび餌を見せられて，しかもそれが与えられぬと，餌を見る前に打ち勝り，大鷹は苦しむものである。それほどに，いや，それにも増して，彼らは待ち焦がれ，苦しんだ。二人の思いは「二夜，いや，三夜の間を，つづけて共寝しないでは，積もる焦がれは癒されませぬ」。（“Êrec” 1847－1875）

“Der guote Gêrhart” と Artusroman 諸作品の間にある，このような類似記述は枚挙にいとまなく，これ以上の指摘は省略しまして，ここでは物語全体の構成について一考してみたいと思います。

Artusroman の主人公の騎士たちは，危険な âventiure のあとに êre（栄誉）を獲得し，美しき妃を得て，一度は栄華に輝きます。他方 Gêrhart は交易の旅によってguot（財）を獲得し，財の力で得た王女を伴ってKölnへ帰還し，王女は彼のために高価な布を織りなして，Gêrhart は利を収めます。Gêrhart は guot と êreを併せて獲得したのであります。

ところが Êrec，Îwein は栄光のただ中にあって過失を犯します。Êrec は妃 Ênîte への愛に溺れて君主としての社会的任務を怠るという過失を，Îwein は騎士の営みにかまけて妃に対する務めを忘れるという過失を犯すのです。そして過失は“Êrec”にあっては荒廃した宮廷の有様と Ênîte の呟く嘆きによって，“Îwein”にあっては Artus 王城に闖入して来た使者の怒りによって，表現されます。他方“Der guote Gêrhart”においては，主人公の子息が栄光の頂点を極めんとしながら，王女との結婚をその寸前に阻まれます。Gêrhart の館の絢爛たる祝宴のただ中へ悲しき巡礼者が登場し，祝宴の喜びに陰を投げかけますが，この場面は Artus 王城への怒れる使者の闖入に対応すると考えられましょう。

恥辱の底に沈められた Êrec もÎwein も，出奔して危険な旅に赴き，さ

らに大きな âventiure を次から次へと克服することにより，己の犯した過失を次第に償って，優れた騎士たることを世に示します。かくて主人公たちはふたたび êre を獲得し，その宮廷は喜びを取り戻します。ここに蘇る栄光は，上辺(うわべ)のみ輝かしきかつての栄光とは異なり，内実を伴った，二度と崩れることのない，真実の栄光であります。他方“Der guote Gêrhart”においてはどうでしょうか？ Gêrhart とその子息は，イングランド王 Willehalm とその妃 Êrêne を伴って，動乱の地 London への危険な遠征を行ない，事態を収拾します。そしてイングランドには平和と秩序，喜びが蘇り，Gêrhart は称賛に包まれるのです。このように見てくると，“Der guote Gêrhart”という作品が，古典的な Artusroman の示す，いわゆる doppelter Kursus（コースの反復）という構成を踏襲していることは明らかです。

ところで Artusroman において主人公が次から次へと立ち向かう多くの âventiure は，不変一様の性格を持つのではありません。物語発端の âventiure が己の身に êre を獲得するための闘争であったのに対し，物語の進行と共に，âventiure は次第に高次元のものへ，すなわち己個人のためではなく，困窮者を救い，宮廷社会に喜びをもたらすための行動へと変容・上昇してゆきます。それに並行した展開は，果たして Gêrhart の場合にも認められるのでしょうか？ 認められるのであります。あのように固執した身代金であったのに，その後彼の思いは次第に利得を離れ，身代金を彼はついに要求しません。若く美しくして悲惨な虜囚の身となっている Êrêne 姫が Gêrhart に対して行なった，あまりに敬虔誠実なる懇願の弁舌（2228－2290）を聴いて以後，報いがあるとすれば，それは財によってではなく，神の恵みによって与えられるべきものという考えが，Gêrhart の心の中で次第に明確化してゆくのです（2364f.，2720－2722，2741－2745）。そして物語の後半においては，Gêrhart はもっぱら Willehalm と Êrêne の幸福を庇護し，London へ渡って平和と秩序を社会にもたらし，危険な旅の目的を完全に果たしますが，その後も，さし出された報酬を彼は受け取らない。Kant（= Kent）公の地位も London 城伯の地位も，そ

して山なす金銀の報酬をも，Gêrhart は固辞する。彼の願うのは反逆者に慈悲をかけてほしいということ（6209－6230）と，妻への土産に ein fürspan und ein vingerlîn（留め金一個と指輪一個）（6494）を頂戴することのみであり，この件，きわめて感動的であります。ともあれ，商人魂を具現していた Gêrhart が，次第に商人性を脱却して，もっぱら隣人愛，神への愛によって行動する人物へと変容してゆくのです。そしてついには，己を顧みるに深い内省と慎みをもってし，次のような言葉を述べうる円熟と敬虔を示すに到ります —

> 善きことを為そうとの思いはあっても，心の弱さがわたくしめから，善き意志を奪ってしまうので，苦しみにある貧しき人に，喜びを与えんとして，わたしの恵んだ喜捨はと申せば，ほんの僅かなものでした。門前に喘ぐ貧者を見ても，わたしの出した施しは，酸っぱいビールにらい麦のパン。豊かなものを神様から頂戴致しておりながら，それを他人に分かったことは，残念ながら，わたくしめには，あまりに稀でありました。わたしが神に思いを致し，その御心に沿わんとて，何か施しを致したとき，わが手の与えた代物は，古着一枚のこともあり，その喜捨でさえ，悲しいかな，神の御為もっとしばしば，為すべきものでありました。わたしの捧げたお祈りは，いつも短うございました。一度お祈りを捧げれば，以後一年は足りるといった，そんな気持ちでありました …（941－964）

Hartmann 等による Artusroman は，低次元の騎士から高次元の騎士へ，単に逞しいのみの騎士から人間性豊かな騎士への向上の過程を語ります。それに対して“Der guote Gêrhart”は，一商人が次第に単なる商人でなくなる過程を，一商人が商人の枠を乗り越えて一人間として円熟する過程を語るのです。der rîche Gêrhart（1165）から der guote Gêrhart に到る過程が，この物語の展開なのであります。

Artusroman との関係を論ずるならば，おのずと浮かび上がるのは Schuldfrage（罪過の問題）でしょう。Artusroman の主人公たちは，erster Kursus（第一のコース，物語前半部）においてなんらかの過失を犯します。他方 Gêrhartは，あたかも過失を犯していないかに見えます。しかし，危うく犯すところであったのです。いや，思い止まったとはいえ，それを画

策しただけで，過失をすでに犯していたと申すべきでしょう。彼は己の財力によって，伜と王女を結婚させようと企てるに至りました。しかしこれは許されない行為であります。何ゆえか？ 理由は二つ考えられましょう。まず第一に，花婿になろうとする伜は未だ Minnedienst（愛の奉仕）の試練をかいくぐってはいないがゆえに，Êrêne 姫の minne を受けるに値しないのです。それは次のように明言されています —

> … 姫君の身に焦がれ悶える，あまりに熱き恋慕の中で，かつて高貴なご婦人がたに，奉仕を捧げて思いの丈を，訴えた驗しのありしや否や，考えてみるということを，伜めは，まこと怠っておりました。あまりに清らな姫の姿を，仰ぎ見るうちに伜めは，それを忘れていたのです。（3558－3562）

男女の真実の結合はいかにして得られるかを執拗に問う“Êrec”や“Îwein”との親近性を，まさに髣髴とさせる言葉であります。伜は Minnedienst を捧げていないがゆえに，Êrêne 姫と結ばれるには未だ値せず，その結婚は真実の栄光には包まれえないものなのです。しかしこれと並んでもう一つ，重要な理由があります。王女である Êrêne 姫と，彼女とは身分違いの，一介の商人に過ぎない伜との結婚は，社会の ordo（秩序）に反する，すなわち神の御心に反する行為であり，それは laster（悪業）（4227）であるがゆえに，神は戒めとして，過失の犯される場に巡礼者を送り寄越されたと考えられるのであります。ここに Êrêne 姫と伜との結婚は中止となり，姫は本来結ばれるべきお方であった Willehalm 王と結婚するのです。つづく London への遠征は，Artusroman における zweiter Kursus（第二のコース，物語後半部），すなわち Sühnefahrt（償いの旅）に相当しましょう。

こまかく見れば，巡礼の出現によって，姫との結婚を阻まれ意気消沈した伜も父に諭されてやがて立ち直りましたし，まして父 Gêrhart 自身が汚辱に陥ったわけでもありません。婚礼のあとの Köln における彼らには，幸せな生活が蘇っているのです。Artusroman における一人の騎士の役割を，この作品では Gêrhart父子の二人が演ずると同時に，Gêrhart は迷誤

の主役であると同時に，周囲を操る人物でもある — つまり Îwein であるのみならず，侍女 Lûneteでもある — ので，関係は錯綜し，Gêrhart の London 遠征を，古典的 Artusroman において恥辱の底に陥った主人公の止むに止まれぬ Sühnefahrt のようには，実感することが困難でもありましょう。そして古典的な Artusroman においては — いかにその行動が鈍重であろうとも — 将棋の王将とも称すべき Artus 王が君臨し，彼を中心として奮迅の活躍をするのは円卓騎士たちでありますから，Artus 王も円卓騎士も登場せず，商人が主人公をつとめるこの物語をArtusromanの変容と見做すことには，いささか無理があるように映るかも知れません。Artusroman の構成が，ここには大まかにのみ，形骸的にのみ受け継がれているに過ぎないとも説かれえましょう。しかし Chréstien 以後においては，Artus 王や円卓騎士たちは Artusroman の単なる小道具であって，doppelter Kursus の克服を通じて人間が成長円熟してゆく展開を描くのが Artusroman の本質であると，もし考えることが許されるならば，今やこのジャンルから Artus 王や円卓騎士といった荒唐無稽のものは不要となり，Artusroman のもつヒューマンな騎士精神の神髄が，古き鎧を砕き普遍的な広がりをもって輝きいでた，とも言えるのではないでしょうか。

いずれにせよ，この作品を der erste Kaufmannsroman といった革新的スローガンのもとにのみ解するのではなく，あくまで Hartmann に代表される騎士文芸の流れに身をひたしたまま生み出された，一つの独創的なヴァリエーションとして理解することが，作品に正当な評価を与えるのではないか，と私は考えます。そしてこの作品の位置づけにおいて，決定的なのは階級問題の帰結でしょう。商人である伜と王女の婚礼を画策しながら，ひとたび Willehalm が現れるや，Gêrhart は王女と伜との結婚を強引に中止させます —

> 姫君は王のお妃なれば，そち（= 伜）が娶るわけにはゆかぬ。姫君とそちの婚姻は，そちに相応わぬことである。（4398－4400）

そして急遽，姫君と Willehalm との結婚を実現させます。また Gêrhart はイングランドにおいて，提供された王位はもとより Kent公の地位をも

辞退しますが，そこにあるのも，己に定められた身分を越える行為はlasterであるという，中世に伝統的な階級観であります —

> 栄光に満ちた公国は，お血筋高貴なお方こそが，統治なさって然るべく，生まれよりして，わたしには，左様なことは，許されませぬ。ケント公の支配の御手は，世の仰ぎ見るものにして，伯やその他の貴族の方や，同じく公と呼ばれている，あまたの高貴な方がたが，封臣として身を屈め，慎んで封を受けられます。高貴な身分のこの方がたが，わたくしごときを主君と呼んで，仰がなければならぬなら，当然，恥でありましょう。公という名を戴くなど，わたくしめには，もったいのうございます。（6187－6200）

また提供された London 城伯の地位をも固辞して —

> この都にてわたくしは，己より身分の高い殿方を，おおぜい拝しておりますが，もしもこの身が君主となり，世の名声に浴するならば，その方がたのご奉仕を，このわたくしが，受ける定めとなりましょう。さりながら，その方がたに主君と仰がれ，主君と呼ばれることなどは，この身に相応しくありますまい。（6280－6290）

階級という角度から考えるならば，商人と王女の結婚，商人による国王即位といった当時の現実では夢想だにされえなかった行為を，ドイツ文芸史上初めて話題にしたという範囲において作品の革新性は認められるとしても，モラルとしてそれらが結論的には否定されており，厳として支配しているのは伝統的な ordo の意識であったという事実は，依頼者および作者である両 Rudolf の思想世界を窺う上には，何よりも重要でしょう。階級の隔たりを越えた行為は，否定されるために話題にされた，とさえ申せましょう。依頼者 Rudolf von Steinach の仕えていた Konstanz 司教が自治権獲得を求める市民たちとの激しい抗争のただ中にあったという事実を指摘するまでもなく，Rudolf von Ems にとって切実であったのは，身の近辺に兆す社会変動，力を増す新興市民階級の存在と，騎士階級の行く末であったに相違ありません。Rhein 河畔諸都市の新たな動きは，Bodensee 地域を見下ろす Ems 城にも，しだいに不気味な地鳴りとなって伝わっていたことでしょう。皇帝Otto の犯した superbia（傲慢）の罪

を外枠部分で語り，同じ罪を危うく犯さんとして思い止まった商人 Gêrhart について内枠部分で述べるこの物語，それは本質においては，財力と政治力を増大させつつ宮廷騎士の流儀を模倣する商人たちの生活態度に対し，騎士でありMinisteriale であった Rudolf が，伝統的騎士文芸 Artusroman の形態を借りて発した警告の書であったとさえ考えられるのであって，「商人よ，驕るなかれ。Gêrhart が皇帝に勝って神意に適う者となりしは，mâze（節度）の徳に目覚めたがゆえなることを，verziht（諦念）と diemüete（恭順）を実行したるがゆえなることを考えよ」という，新興市民への警告の書であったとさえ解されるのではないでしょうか。

"Der guote Gêrhart"，新しき音色で古き讃歌を歌う，この作品の革新性と伝統性の鋭き交錯に，少しばかり光を当ててみた次第です。

使用テキスト，参考文献等：Rudolf von Ems: Der guote Gêrhart. Hg. von John A. Asher. 3. durchgesehene Aufl. (ATB 56). Tübingen 1989. ただし紙幅制限のため，原文引用は諦めざるをえなかった。同様の理由から参考文献の指示も省略するが，比較的新しいものとして，次の二書所収のWolfgang Walliczekによる論述を挙げておく: 1) Die deutsche Literatur des Mittelalters. Verfasserlexikon. Hg. von Kurt Ruh zusammen mit Gundolf Keil, Werner Schröder, Burghart Wachinger u. Franz Josef Worstbrock. Bd. 8, Lieferung 2. Berlin - New York 1991. Sp. 322 - 345. 2) Interpretationen. Mittelhochdeutsche Romane und Heldenepen. Hg. von Horst Brunner. (RUB 8914). Stuttgart 1993. S. 255 - 270. また 1) Sp. 343 および 2) S. 269f. 掲載の研究文献表参照。そして同書以後に刊行された重要文献として，次の著作を指摘しておきたい: Sonja Zöller: Kaiser, Kaufmann und die Macht des Geldes. Gerhard Unmaze von Köln als Finanzier der Reichspolitik und der „Gute Gerhard" des Rudolf von Ems. (Forschungen zur Geschichte der älteren deutschen Literatur. Bd. 16). München 1993. 本稿中の Mhd. テキストからの邦訳はすべて平尾による。

なお平尾は"Der guote Gêrhart"という作品を，長きにわたって大学院ゼミにおける考察対象としたが，そこでの活発な討論からは常に良き刺激を得ることが出来た。ゼミ参加者の熱意に深く感謝する次第である。そして平尾の慶應義塾在任中，さまざまなご支援をくださった先生方のご厚情に対して，この場を借りて心からなる御禮を申し上げます。